

### <論文>六条御息所伊勢下向の意味

嘉成, 悠紀 / カナリ, ユキ

---

(出版者 / Publisher)

法政大学国文学会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

日本文学誌要

(巻 / Volume)

52

(開始ページ / Start Page)

30

(終了ページ / End Page)

41

(発行年 / Year)

1995-07-08

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00019842>

# 六条御息所 伊勢下向の意味

嘉成 悠紀

## はじめに

夕顔巻以来、「六条わたり」の女君として描かれてきた登場人物が、初めて「六条御息所」として語られるのは、葵巻に入ってからである。

「まことや、かの六条御息所の御腹の前坊の姫君、齋宮にゐ給にかば、大将の御心ばへもいと頼もしげなきを、幼き御有さまのうしろめたさにことつけて下りやしなまし、とかねてよりおほしけり」と、新齋宮の母としての性格を付与され、葵巻で再登場することになるのである。

池田勉氏<sup>(1)</sup>はこのことに関して、新しく源氏の妻として紫の上が台頭してくるために、葵の上の死と六条御息所の伊勢下向が必要であったとし、齋宮の母という属性も新しく付与しなければならなかったとしている。

また、大朝雄二氏も、「物語の展開に従った人物の据え直し、新しい条件設定が行われている<sup>(2)</sup>」とし、「御息所は物語表面から退場するため

に、葵巻でもって改めて再登場せしめられている<sup>(3)</sup>と指摘されている。これらは、正当な見解であろうと思われるし、傾聴に価するであろう。

しかし、何故わざわざ伊勢下向という形での退場でなければならぬのか。源氏との仲を思い悩んで、そして自分が生霊となつて人に仇なしたことを嘆いて、ということなら、この時代、出家という方法をとる方が自然であるように思われる。しかも、自分が齋宮というわけではなく、娘に付き従つての下向であり、物語中にも、「親添ひ下り給例もことになけれど」と語られている。ここで思い出されるのは、歴史上の人物で娘と一緒に伊勢に下向した、齋宮女御徽子女王の存在である。これまた古注以来、諸氏に指摘される所だが、六条御息所の伊勢下向に関する準拠として、この徽子女王が考えられるのである。

徽子女王の人生を、次に簡単に述べておくことにする。徽子女王は延長七（九二九）年、醍醐天皇の第四皇子重明親王の第一王女として生まれた。承平六（九三六）年、八歳の時に伊勢齋宮に卜定され、天慶元（九三八）年、十歳で伊勢に下向した。天慶八（九四五）年に母の死によって一七歳で帰京した徽子は、天曆二（九四八）年、二十歳

で村上帝の後宮に入内することになる。翌年、村上と徽子の間に生まれた第四皇女規子は、天延三（九七五）年、二七歳で母と同じように齋宮に卜定され、貞元二（九七七）年、伊勢に下向した。この時、前例が無いことながら、戻るようにとの宣旨をも振り切つて、母徽子は娘と共に伊勢に下向したのである。このとき、母徽子は四九歳、娘の規子は二九歳であった。

この娘と共に伊勢に下向するという点においては、御息所と同じであり、齋宮が帰京した後、入内するという点においては、御息所の娘、秋好中宮と同じであるといえる。つまり、森本元子氏が指摘されるように、『源氏物語』の作者はこの徽子の辿つた人生を「御息所とむすめの齋宮女御とに二分して与えた」ということである。

しかし、構想上の必然性として、葵の上を排除し、自らも物語から退場しなければならなかったという御息所の役割はわかるとしても、その退場の場が何故、伊勢でなければならなかったのか、奇異な運命を辿つた徽子女王を準拠とせねばならなかったのか。

『源氏物語』の作者が、物語を描く上で徽子女王の史実を利用しながら、いかに独自の発想を取り入れ、文学へと膨らませているのか、徽子女王の伊勢への足跡を辿りながら、考えてみたいと思う。その上で、準拠としての意義など、検討してみたい。

## 1. 齋宮卜定・初齋院の頃

規子内親王が齋宮に卜定されたのは、前述したとおり天延三年、二月二七日のことであった。

『延喜式』には、齋宮が卜定後すぐ初齋院に入らねばならないこと

が記してあるが、規子内親王の場合は、初齋院が定まらないこと、内裏の桂芳坊に犬の死穢があったこと<sup>(5)</sup>、などの理由により、初齋院入りは大幅に遅れ、初齋院と定められた侍従厨家に遷座したのは、『日本紀略』の記事によれば貞元元年の二月二六日のことであり、齋宮に卜定されてから、実に一年後のことであった。

『源氏物語』においても、六条御息所の娘の齋宮の初齋院入りは遅れた。「齋宮は、こそ、内に入り給べかりしを、さまざま障ることありて、この秋入給」と葵巻にある。初齋院に遷座した季節こそ違うものの、障りがあつて初齋院入りが遅れたという点では規子内親王の場合と同じである。

また、この『源氏物語』の記述に関しては、玉上琢彌氏<sup>(6)</sup>、所京子氏<sup>(7)</sup>等が規子内親王の史実を踏まえて書かれていると推測し、指摘されている。

田中隆昭氏<sup>(8)</sup>は、仁明朝の久子齋宮から一条朝の恭子齋宮までの、卜定・初齋院入り・野宮入り・群行の日時を調査され、それをもとに「……光孝天皇の時、繁子内親王が齋宮となり、『犬死穢』や『月事』で伊勢下向が次々と延びたという例はある」が、規子内親王の場合のように、「それほど長期間本宮に居た例は他に見出せない」として、「恐らく作者は筆をとるとき、このような具体的な事実を頭の中では想定しながら、実際の叙述には『さまざまはることありて』と極めて曖昧に表現しているのであつて、そこに物語というものの性格が感じられて興味深い」（圏点・引用者）と考察されている。

さて、このように規子内親王の場合は遅れに遅れた初齋院入りであるが、初齋院の場である宮中の侍従厨家において詠まれたと思われる歌が『齋宮女御集』の中にある。

つかさざうしにすみ給ひけるころ、むかしのうちをお  
ほしいでて、一品宮にきこえ給ひける

一七二 すぎにけむむかしはちかくおもほえてありしにあらぬほど  
ぞかなしき

この宮はうちにおはします

一七三 わすられぬむかしながらのうちなればありしにかはるそで  
はぬれけり<sup>9)</sup>

「つかさざうしにすみ給ひけるころ」という詞書から、初齋院中の  
詠歌と推測できる。また、歌の内容から考えてこれは規子の歌とする  
より、母の徽子の歌とした方がよいと思われるので、とすれば徽子が  
初齋院にも娘に同行していたと考えることができる。

この歌の受取手である一品宮とは村上第九皇女資子内親王（母は中  
宮安子）と思われるが、一七三番歌の詞書の受け取り方によつては、  
一七二番歌が徽子のもので一七三番歌はそれに対する資子からの返歌  
のようにも受け取れる。しかし『齋宮女御集注釈』<sup>10)</sup>が、この歌を宮の  
ものとする、歌の中の「ありしにかはるそで」という語が説明しに  
くいととして、二首とも徽子の詠歌としている解釈に私も従いたいと思  
う。一七三番歌の詞書は「この一品宮は宮中にいらつしやいます、  
その宮に」と圈点部を補つて考えることにしたい。

さてこの二首とも、かつて徽子が女御として住まいしていた内裏を、  
當時を、思い出しているの詠歌である。村上帝崩御の後内裏を去り、再び  
娘と共に戻ってみれば（とはいえ二人の今いる場所は内裏ではなく大  
内裏、それもそのはずれ、美福門のすぐ脇である）、かつての内裏、後  
宮が昔のままの姿ですぐそこに存在しているかのような錯覚にとらわ

れる。しかしそれはあくまでも錯覚でしかなく、目の前の内裏に村上  
帝はもういない。かつて自分の過ごした内裏に今いるのは、円融帝と  
その女御たちである。内裏にいる面々は昔と変わってしまったとはい  
え、あまりに昔のままの内裏がすぐそこにあるものだから、昔とはす  
っかり変わってしまった自分の袖を涙で濡らすのである。

この「ありしにかはるそで」について、前掲の『齋宮女御集注釈』  
では、徽子も娘と一緒に禊齋の装束を身につけており、かつてと同じ  
宮中にありながら、女御時代の華やかな装束とはすっかり変わってし  
まったこと、と解釈している。確かにそういったことも想定できるが、  
そこまで具体的に考えなくとも、かつて後宮に女御として居た自分と、  
今齋宮の母として侍従厨家に居る自分との、あまりにも変わってしま  
った境遇を暗示するものとしてとらえてもよいように思う。

この二首ともその歌の根底に流れるのは、「かつての自分」と「今の  
自分」との境遇の対比である。

堀恵子氏はこの歌に対して、「『ありしにあらぬ』は村上後宮に比べ  
て人数も少ない円融後宮に対する特殊な感慨があると思う。資子もま  
た村上後宮の全盛を『忘れぬ』一人であった」と指摘している。確  
かに資子に関しては、氏の指摘は正しいと思う。資子がかつての村上  
後宮の思い出を共に懐かしむことのできる人物だからこそ、徽子は彼  
女のもとにこの歌を贈つたのだろう。しかし、氏の指摘の前半部に関  
しては、私の考えは逆である。現在の内裏が人数少なく寂しいもので  
あるという感慨ではなく、むしろもっと個人的な、自分の境遇がかつ  
てとは違う寂しいものである、という感慨なのではないか。かつては  
帝の女御として後宮に居た自分と比べ、現在は齋宮である娘の付添い  
として、大内裏のはずれに居る自分。そういつたことに対する感慨の

ように思う。

『源氏物語』における初齋院入りの記事はそつけないものだが（それは初齋院の場所が宮城の中ではない左衛門の司であるということも、もしかしたら関係するのかもしれない。御息所のおそらく行ったことのない左衛門の司では、その感慨を書こうにも難しい）、そのかわり、下向の日に宮中で別れの櫛の儀式が行われるときに、御息所の内面が描かれている。

宮すん所、御輿に乗り給へるにつけても、父おとゞの、限りなき筋におほし心ざして、いつきたてまつり給しありさま変はりて、末の世に内を見給にも、もののみ尽きせずあはれにおぼさる。十六にて故宮にまいり給て、廿にてをくれたてまつり給。卅にてぞけふまた九重を見給ける。

そのかみをけふはかけじと忍ぶれど心のうちにもものぞかなしき

（賢木巻）

この御息所の感慨は、前坊、すなわち東宮が帝位につく前に亡くなり、父の思惑もはずれこのような身の上になってしまった、という哀しみを含んだ感慨であるから、その状況の違いからも徽子の場合と同一線上では論じられないかもしれない。しかし圈点を付した部分、かつての境遇と現在の境遇をひき比べて嘆くさま、一度後宮から退去しながら、再び齋宮の付添いとして内裏を訪れての御息所の感慨に、私は徽子女王を思い出す。二人の心の内は、その感慨の理由は違うとはいえ。

## 2. 野宮にて

さて、初齋院の時期が過ぎると、齋宮は野宮に遷ることになる。『延喜式』によれば、齋宮卜定後二年目の八月に野宮に入ることが定められていたようである。ただし、田中隆昭氏によれば、八月に野宮入りが行われているのは陽成朝までのこと（それも『延喜式』には八月上旬と定めてあるが、八月上旬に行われている例はないという）、それ以後は醍醐朝を除いてすべて九月に行われているという。

規子内親王の場合も野宮入りが行われたのは、『日本紀略』によれば貞元元年の九月二日、つまり卜定後二年目の九月のことであり、侍従厨家で約七カ月を過ごしてからのことであった。『源氏物語』の場合も、（日付までは記していないが）九月のことであった。

また野宮と言え、野宮における源氏と御息所の別れの場面は『源氏物語』の中でも出色の美しい場面であり、葵巻・賢木巻には、齋の場である野宮においても御息所らしく、風情ある暮らしを送る様子が描かれている。

さるは、大かたの世につけて、心にくよしある聞こえありて、昔より名高く物し給へば、野の宮の御移るひのほどにも、おかしういまめきたる事多くしなして、殿上人どもの好ましきなどは、朝夕の露分けありくをその此の役になむするなど聞き給ても、大將の君は、ことはりぞかし、ゆへは飽くまでつき給へる物を、もし世中に飽きはててくだり給なば、さうくしくもあるべきかな、とさすがにおぼされけり。（葵巻）

はるけき野辺を分け入り給より、いとものあはれなり。秋の花  
みなおとろへつゝ、浅茅が原もかれぐなる虫の音に、松風すこ  
く吹あはせて、そのこととも聞きわかれぬほどに、ものの音ども  
絶えく聞こえたる、いと艶なり。(賢木巻)

おそらく徽子・規子母子も、このように風情ある野宮暮らしを送つ  
ていたと思われる。いや、彼女たちの生活を模して『源氏物語』の中  
の野宮が描かれたのであろう、と言いなおした方がいいだらうか。

賢木巻の圏点を付した部分は、徽子女王の次の歌を引歌としている  
ことは、古注以来指摘されていることである。

のの宮にてきんに風のおとかよふというだいを

五七 ことのねにみねのまつかぜかよふなりいづれのをよりしらべ  
そめけむ

この歌は、『拾遺集』『古今六帖』『和漢朗詠集』などをはじめとして  
多くの歌集に採られる秀歌である。またこの詞書からも、この歌は貞  
元年十月二七日に行われた野宮庚申歌合で詠まれたものであるらし  
いことが推測できる(『源順集』に「初の冬のかのえさるの夜、伊勢の  
いつきの宮にさぶらひて、松のこゑ夜の琴に入るといふ題にて……」  
とある)が、徽子母子のもとに公達が集う様と、御息所のもとに公達  
が集う様(葵巻の圏点部)、ぴたりと重なり合うのである。

野村精一氏がこの引歌に關し、<sup>(13)</sup>「齋宮女御が単なるモデルではない  
ことはしられよう。準拠の意味の幅広さに注意したい」と指摘されて  
いるが、まさにその通りで、伊勢に下向するという史実だけを模して

いるわけではないのである。

さて、一年の長きに渡る野宮生活も終わりが近づくと、つまりは、  
伊勢下向の日が近づくとということである——と、徽子のもとには沢山  
の饒別の歌が届けられたらしい。この頃に交わされたと思われる多くの  
の歌が、『齋宮女御集』には収められている。七四・七五・七六・一五  
〇・一五一・一五七・一五八・一五九・一六〇・一七四・一七五・一  
九五・二〇二・二〇三・二一七・二一八・二四〇・二四二の歌がそれ  
であり、これらの歌は、資子・つちみかど(女房か)・堀川中宮皇子・  
大齋院選子・御匣殿女御慰子らと交わされた歌、また規子の独詠歌な  
どである。

中でも一七四番の「すぎにしもいまゆくすゑもふたみちになべてわ  
かれのなきよなりせば」という歌は、『源氏物語』夕顔巻で源氏が、死  
んでしまった夕顔と、伊予介と共に任地に下っていく空蟬を思つて  
詠んだ独詠歌、「過ぎにしもけふ別るゝも二道に行くかた知らぬ秋の暮  
かな」の本歌と思われる。『河海抄』では「此歌同心也」と評し、また  
増田繁夫氏は「ふたみち」の語は現存する一条朝以前の歌にはこれ(徽  
子女王の歌のこと・引用者注)以外例が見えない」と指摘され、「齋宮  
女御の歌は人との死別と人が都から去ることによる別れと、二種の別  
れを嘆いたものであり、歌の内容からしても深い類似性をもつてい  
る」と考察されている。六条御息所母子の造型以外にも、徽子が『源  
氏物語』に影響を及ぼしている例である。

ところで、このように徽子は多くの友人たちに惜しまれながら都を  
後にするわけであるが、それに比べて『源氏物語』には御息所の、あ  
るいは齋宮の、友人たちとの歌の贈答は描かれていない。ただ、御息

所と源氏との美しい別れの場面、そして「齋宮の御下り近う成ゆくまゝに、御息所、もの心ほそく思ほす」との描写があるのみである。

勿論、『源氏物語』の御息所の伊勢下向は、何もかも徽子女王の史実を模しているわけではないし、御息所の人物造型も部分的には徽子に負うところもあるかもしれないが、全体的に見れば別の人格である。先に、御息所の野宮での暮らしぶりが徽子母子のそれを模していると述べたが、それも『源氏物語』では、源氏との美しい別れの場面を演出するために取り入れられているのである、と言っても過言ではないだろう。

あくまでも『源氏物語』の御息所に関するプロットの流れは、物の怪事件から源氏との別離、伊勢下向と続いている。現実的に考えれば確かに、御息所と源氏以外の誰かとの歌の贈答がないのは不自然なところかもしれない。しかし、これは物語なのである。そもそも脇役ではない御息所に、源氏以外に歌の贈答をするような相手が用意されていないということもあるかもしれないが、万が一そこまで緻密に、リアルに物語が細部まで書き込んであったからといって、それが感動を呼ぶとは限らない。

『源氏物語』では、娘に付き添っての伊勢下向という特異な史実を物語の中にもうまく利用しながら、その下向の理由を、源氏との冷めた愛、そしてその前に起こった物の怪事件（また、それを源氏にも知られてしまったということ）とする。そしてその別離の場を、神域である野宮にもつてくる。御息所自身は齋宮でないとはいえ、神の齋垣の中で男女が逢う、しかもそれが別離の場面であるとは、いかに特殊なことだったろうか。当時の読者は『伊勢物語』をも想起して読んだのかもしれない。『源氏物語』の作者は、徽子女王の史実をうまく利用し

ながら、独創的な物語へと仕上げているのである。

この野宮の場面に、源氏以外の誰かと別れを惜しむ場面なり、歌の贈答なりが挿入されていたとしたら、それは蛇足以外の何物でもない。御息所の伊勢下向は源氏との訣別なのであり、御息所の都との別離が源氏との別離に集約されているからこそ、この場面が美しく、読む者を感じさせる印象的な場面として、仕上がっているのではなかるうか。

### 3. 伊勢下向・齋宮群行の道

齋宮はおよそ一年間の野宮での禊齋生活を送ると、いよいよ伊勢に下向することになる。『延喜式』には、九月の上旬に下向するよう定められているが、規子内親王の場合も『源氏物語』の御息所の娘の場合も、伊勢下向の日は同じく九月十六日のことであった。田中隆昭氏によれば、「他の史実には十六日に行われたという例は見当たらない」という。また、「この物語が『十六日』などと正確に記す場面はその意味が具体的にあり、これも齋宮女御の例に准拠したことを示すものと思われる」との増田繁夫氏の指摘もある。

勿論、日付だけではなく、母親同伴であるということも、両者の共通点である。それがいかに異例なことであるかは『日本紀略』の貞元二年九月十七日の条に「宣旨、伊勢齋王の母女御相従ひて下向すること、是れ先例無し。早く留めしむべしてへり」（原文漢文）と、徽子を留めようとする宣旨までが出されていることからわかる。しかし、徽子はそれを振り切って、伊勢まで同行した。『源氏物語』の中にも、これが異例のことであるということは、「親添ひ下り給例もことになけれど」「世人は、れみなき事と、もどきもあはれがりもさまざまに聞こ

ゆべし」(賢木卷)「齋宮にも親添ひて下り給事は例なきことなるを」(濤標卷)と何度も書かれている。

このように『源氏物語』の中で、しきりにこれは前例がないことだと書き続けることについて、古注では、物語全体を通して物語の時代設定が現実の延喜の帝の時代に擬せられているからだ、という理由によって説明している。確かにかつてはこういった「物語世界に歴史的時間と重なる時代設定が一時期通説化」していたわけだが、現在では『源氏物語』とは「歴史書あるいは史実と深く関係しつつも、それとは異なる虚構の世界である」<sup>(18)</sup>、「源氏物語の作者は様々の歴史的イメージを織り込みながら、結局、虚構の世界を作りあげていることはあきらかか、どの人物が誰、どの時代がこれと断定することはできない」<sup>(19)</sup>などの意見が主流であり、そのように考えて問題はなからう。

たとえば徽子女王のことにしても、森本元子氏が「六条御息所の伊勢下向について、賢木の巻に『親添ひて下る例もことになけれど』とわざわざしているのも、作者の頭の中に史実に徴した知識があつて、徽子女王の場合はその特例であつたことを思い、符節を合わせたのであろう」としているがまさに正論で、あくまでも作者は史実を利用しながら虚構の世界を描いているのである。歴史物語ではないのだから、現実の歴史と物語の世界とは何もかもが一致するわけではないだろう。前節、前々節から繰り返し述べているように、作者が史実をどのように利用しながら、物語をどのように膨らませているのか、というように準拠の問題を考えてみたいと思つているし、その方が重要なことと思われる。

さてそれでは、徽子女王の娘に付き添つての伊勢群行は、『源氏物語』にどのような影響を及ぼしているのか。『齋宮女御集』には、群行時に

詠まれたとおほしき次の歌が載せられている。

しのびてくだり給ふ、なほとと、女御殿

一三〇 ずかやまふるのなかみちきみよりもききならすこそおくれがたけれ

御かへり、いせより

一三一 ずかやまおとにききけるきみよりもこころのやみにまどひにしかな

もろともにくだり給ふ、ずかやまにて

二六二 よにふれば又もこえけりずか山むかしのいまになるにやあるらん

みやの御かへり

二六三 ずかやましづのをだまきもろともにふるにはまさることなかりけり

鈴鹿山を読み込んだ歌が続いているが、これは伊勢下向時に通る歌枕である。齋宮の群行は、都から伊勢まで全六日の行程で、鈴鹿山を越えるのは四日目のことである。実際にここを通過する時に詠まれた、もしくは受け取った歌ではなくても、群行の道程を象徴するものとして鈴鹿山を詠み込んだのであろう。

さてこの一三一番歌、惣子(『齋宮女御集注釈』に従いそう考える)と交わした歌の中で、徽子は伊勢下向の理由の一端をにおわせている。この歌の下の句は『後撰集』『大和物語』などに採られている兼輔の有名な詠歌、「人の親の心は闇にあらねども子を思道にまどひぬる哉」を本歌とすると考えられる。勿論、前例のない娘に付き添つての人生二

度目の下向を決意するからには、子を思う気持ちだけがその理由であるとは考えにくい、ただ一人の娘を思う親心によって決意したという側面も確かにあったことだろう。とはいえ規子はこのとき二九歳。普通ならもう心配するような年齢ではないようにも思えるのだが。

『源氏物語』では「幼き御有さまのうしろめたさにことつけて」、「いと見放ちがたき御ありさまなるにことつけて」と、下向理由について述べられているが、あくまでもそれに「ことつけて」であり、子供を心配するあまり、というのは一義的な理由ではないだろう。源氏との冷めた関係、物の怪事件、それを源氏に知られてしまったこと、これら一義的な理由があつて、それを齋宮が心配であるということを隠れ蓑にしなが、下向を決意するのである。竹西寛子氏が「すすんで伊勢行きを決めたのも、おとしめられた女のみじめさ、辛さをかばおうとする、わが身可愛さからのあわれな心くばり」としているが、まさにそれが第一の理由であつたらう。また野村精一氏は前例のない下向を決意したということに関して「あらゆる世俗の常識を断ち切って、己れ自身の肉体を、どうでも転移させなくてはならぬ、内面の凝集ないし情念のエネルギーをよみとることができよう」と指摘している。物の怪となつてしまったから伊勢に行かざるをえなくなつてしまったし、また物の怪になるほどの内面を隠し持っているからこそ、できた決断とも言えようか。『源氏物語』において、徽子母子のような強固な母子関係ができあがるのは、もつと後の、御息所の死期が近づいてからのことである。

反対に娘から母への思いを詠んだ歌は二六三番歌である。徽子は二六二番歌で「この世にこんなに生き長らえてしまったから、またもこの鈴鹿山を越えて伊勢に行くようなことになつてしまったのです」と

感慨を込めて詠んでいるが、それに対して二九歳、もう決して若いとは言えない規子は「一緒に年をとりましょう」と母に共鳴する。大変美しい母子関係ではないか。『源氏物語』でも、齋宮から母への思慕の情を読み取ることはできるが（賢木巻「齋宮は、若き御心ちに、不定なりつる御出で立ちの定まりゆくを、うれしとのみおぼしたり」、なにごん幼い齋宮ゆえ、規子の場合と同列に引き比べるのは難しい。

ところで、徽子の歌から伊勢下向に対する哀しみがそれほど感じとれないのは気のせいだろうか。別れを惜しむ多くの友人たちとの贈答歌が、沢山の人から慕われた幸せな人物だったことを想像させる。それに対し御息所の場合は、下向という事柄が、源氏との別離ということに集約されるだけに、哀れを増す。

また、『源氏物語』の中では群行についての詳しい記述がない。「このような物語場面での制度に対する『語りの沈黙』——寡黙であることがかえって、この時と場の緊張した状況を暗に開示する」との小林茂美氏の指摘があるが、ここでも先の野宮の段と同じで、ここに詳しい儀式の次第が描いてあつたとしたら、それは蛇足でしかないのである。源氏との歌の贈答があるだけで、充分なのだ。

徽子女王の史実をその材にとりながら、『源氏物語』から受ける印象は、徽子の場合とあまりにも異なる。徽子母子の下向からは、その強固で美しい母子関係というものが、歌集をみる限りでは強く印象付けられる。それに対して『源氏物語』の作者は、（この場面においては）そういったことをすっぱりと切つて、源氏と御息所、二人の別離を美しく描くことに終始努力している。

野宮での別離の場面では、源氏を「男」、御息所を「女」と呼ぶ。玉上琢彌氏が「恋の場面を乱す要素は、すべて排除される」と指摘して

いるが、この呼称によって二人は昔物語の主人公たちのような、純粹な恋愛の関係におかれているのである。あくまでもここでの御息所は「母」ではなく、「女」として描かれているのだ。

#### 4. 罪深き所としての伊勢

以上、齋宮女御徽子女王と六条御息所を伊勢下向に関して、両者を比較しながら見てきたわけであるが、徽子が準拠であるということは確実ながら、御息所はその性格を徽子とまったく同じにするというわけではない。御息所は、思い悩むあまり生霊となり死霊となる、という特異なキャラクターとして『源氏物語』の中に位置付けられているのであるが、そのような点まで、徽子を準拠として描かれているわけではなからう。『齋宮女御集』の中に見える徽子の女御時代の歌は、確かにその不遇を嘆き、御息所との共通項なるものも見受けられるが、それはこの時代、徽子だけが持っていたものではあるまい。徽子をはじめとする当時の多くの女性が持っていた心の疼きを基に、遊離魂等の信仰やオリジナリティーを加味し、造型されたのが御息所の生霊だったのではなからうか。

では何故、徽子女王という特異な例を準拠として、傷心の御息所を伊勢に下向させねばならなかったのか。最初に述べたように、構想上、葵上と御息所が物語から退場しなければならなかったとしても、葵上を取り殺した後の御息所の退場の仕方は、出家というありきたりな方法でもかまわない、それでも構想上は何ら問題はなかった筈である。なのに何故、伊勢下向なのか。

ここで思い出すのは『齋宮女御集』の二五九番、伊勢で徽子が詠ん

だ「みな人のそむきはてぬる世中にふるのやしろのみをいかにせむ」という歌である。これは「世中をそむく人のおほかるころ、女御」という詞書が付いていて、多くの友人たちが出家していく中で、伊勢にいる自分は出家することもできずに老いていくことを嘆く歌である。伊勢という神域の特殊性をここで思い出すわけだが、仏教を忌む神域では、仏教用語すら禁句であり、そんな中で出家することなどできる筈もない。年をとれば皆、当然のように仏の加護を求めて出家する時代に（徽子と近い間柄の多武峰少将藤原高光などは、若くして出家している）、自ら選びとった道とはいえ、出家することも、いや仏の名さえも口にできない環境にいることに、徽子は悩みはしなかったのか。そういった環境に飽き足らず、齋院在任中に『発心和歌集』を編んだのは、徽子との交際も『齋宮女御集』に見える同時代の賀茂齋院、大齋院選子内親王であった。選子は五七年の長期にわたり、齋院として神に奉仕し続けたという特殊な環境にあるので、単純な比較はできないかもしれないが、仏事を忌む神域にある人間が、仏教に対してどのような思いを抱いていたか、参考にはなる。『大齋院前の御集』の中に、選子の歌ではないが、彼女に仕える女房の歌で、神域に仕える女たちの気持を代弁するような次の歌がある。

六日のよさり、いかにこのごろてらでらにおこなふらむ、  
つみぶかくもあるかなとて、さい将

三〇 この世にもりの道にもおくるればたのみかからぬはち  
すばのつめ

進

三一 つゆの身のいかにむすびしよなればかはちすのうへをおも

ここで、神域に居るために仏教に携わることができないのを、罪深いことだと言っていることに注目したい。「源氏物語」の中で、須磨巻で御息所から源氏に贈られた文に「罪深き身のみこそ、又聞こえさせむこともはるかなるべけれ」とあったこと、また瀟標巻で帰京した御息所が「罪深き所ほとりに年経つるもいみじうおぼして」出家したことなどが、想起されるのである。「枕草子」にも「齋院、罪深かなれど、をかし」とあるから、齋宮や齋院が罪深いということとは、この時代の一般的な観念であったように考えられる。意味を伴わない慣用句というわけでもないだろう。現に、御息所は死後、成仏できただろうか。

御息所の物の怪については、生霊についても死霊についても、古くから様々論じられてきた。ここでは、死霊について少し考えてみたい。先述したように、生霊事件は紫の上を台頭させるための葵の上の死、そして御息所の退場を促す契機として、構想上必要であったと言える。では、死霊事件の構想上の必要性は何か。それは、大朝氏も指摘するように、「女三宮事件を惹きおこすために作為されたもの」と考えることができるであろう。そして、この事件によって光源氏は不義の子、薰という「因果の重み」を認識することとなり、「心ならずも己の自己過信や傲慢から彼らを苦しめることになった源氏が、ある瞬間その苦悩を自らの痛みとして感ずる」という大きな意味があったと言える。

若葉下巻に現れた御息所の死霊は、「なをみづからつらしと思ひきこえし心の執なむ、とまるものなりける」と言い、また「いまはこ

の罪のかるむばかりのわけをせさせ給へ」と供養の要求をし、また娘への伝言として、「齋宮におはしましころほひの、御罪かるむべからむ功德の事をかならずせさせ給へ」と言う。ここで物の怪発動の直接的契機となっているのは、御息所自身も語るとおり、源氏が紫の上との間で御息所について中傷したことであるわけだが、成仏できないでいるのは、「心の執」のせいであり、そのような罪を軽くするために供養して欲しいと頼むのである。

ここで注目したのは「罪」という語であり、自分の「罪」だけではなく娘が齋宮であったときの「罪」についても、言及している点である。小嶋菜温子氏も指摘する点だが、御息所がここで言う供養を欲する自分の罪とは、表面的には、「心の執」のせいで物の怪となってしまう罪のことであるが、ここで齋宮の罪を持ち出すことによって、御息所自身の罪も重層的な意味合いを帯びる。そう、御息所自身、齋宮と共に伊勢に下ったのだから、御息所としてこの罪を負っている苦なのである。つまり、女としての心の執が作る罪と、伊勢で犯した罪とを二重に背負っているわけだ。石埜敬子氏は葵巻の生霊事件のきっかけのひとつも、齋宮卜定という「仏の加護を離れた世界」に見出し、「当時の信仰に裏打ちされた設定であろう。仏の世界に対する伊勢の世界を出してきている点、注目される」と指摘する。また、藤本勝義氏は、御息所の死霊が紫の上を絶命させたのは「仏事を忌む神事」の日である葵祭の当日であったことから、仏事と神事の対立を示唆している。

「心の執」ということが作りだす罪が前提としてあるのだから、もし伊勢に下向しなかったとしても、御息所は死後も物の怪となり続けたであろう。しかしもうひとつの罪を付加することによって、

物語はより深みを増す。

六条御息所は生霊となつてしまふような、「心の執」を持つ人格だつたがために、伊勢に下向せねばならなくなつた。そして、仏の加護を得られない地、伊勢に下向することによつて、新たな罪をも背負い、死後も物の怪となる。物の怪となり続けるのは、死んでもなお、伊勢下向の原因ともなつた思い詰める心を、現実に深く執着する心を、捨てきれないからでもあつた。現世に対する執着は、成仏の妨げとなる。宇治大君は「さる物思ひに沈まず、罪などいと深からぬさきに、いかで亡くなりなん」（総角巻）と言っているが、生前も男女間の愛憎によつて心悩ますことは罪であり、成仏の妨げになるのである。だから皆、生きながら現世及びさまざまなものへの執着を断ち切るために、出家するのである。してみると、生霊となるほどの執着心を持つ御息所は、既にこの時点で一つの罪を犯していたということだろうか。そして、この罪が伊勢下向という仏教断絶の罪を招き、最初の罪と仏教断絶の罪は、死後物の怪となる事態を招き寄せる。それぞれの罪が絡まりあつて、御息所の周りに、二度と出られぬ迷宮を作り出すかのようである。

六条御息所は葵巻の冒頭、「御息所」として語り出される初めに、齋宮の母として規定された。そしてこの時点で、おそらく生霊事件も伊勢下向も、既に構想としてあつたのではなからうか。生霊事件に出家という形の結末をあえて与えたくなかつたがために、齋宮の母という役割を付与し、娘と共に伊勢に下向した徽子女王の史実を援用する必要性があつたのではないかと考えるのである。

注

- (1) 池田勉氏「源氏物語『六条御息所』造型の根拠」〔源氏物語試論〕昭和四九、初出『成城国文学論集』二 昭和四四・一一
- (2) 大朝雄二氏「源氏物語正篇の研究」〔昭和五〇〕
- (3) 大朝雄二氏「六条御息所の苦悩」〔講座源氏物語の世界〕三 昭和五六
- (4) 森本元子氏「齋宮女御と源氏物語」〔私歌集と新古今集〕昭和四九、初出『むらさき』一一 昭和四八・六
- (5) 『日本紀略』天延三年二月二十八日・貞元元年二月一七日
- (6) 玉上琢彌氏「源氏物語評釈」〔昭和三九〕
- (7) 所京子氏「源氏物語の齋宮と女官」〔源氏物語講座5 時代と習俗〕平成三
- (8) 田中隆昭氏「源氏物語歴史と虚構」〔平成五〕第五章 六条御息所・秋好中宮・玉鬘（初出「源氏物語と史実——秋好中宮の場合——」『平安朝文学研究』九 昭和三八・七）
- (9) 西本願寺本三十六人集系統を底本とする『新編国歌大観』による。一七三番歌の詞書、小島切本には「みやの御返し」とある。
- (10) 平安文学輪読会『齋宮女御集注釈』〔昭和五六〕
- (11) 堀恵子氏「徽子と後宮」〔平安文学研究〕六三 昭和五五・七
- (12) (8)に同じ
- (13) 野村精一氏「野宮のわかれ」〔講座源氏物語の世界〕三 昭和五六
- (14) 増田繁夫氏「六条御息所の准拠——夕顔巻から葵巻へ——」〔源氏物語の人物と構造〕昭和五七
- (15) (8)に同じ
- (16) 増田繁夫氏「作品世界は史実とどこまでかわるか」〔国文学〕昭和五五・五
- (17) 仁平道明氏「源氏物語の准拠」〔国文学〕平成七・二
- (18) 篠原昭二氏「桐壺の巻の基盤について——準拠・歴史・物語」〔東京大学教養学部人文科学紀要〕八五 昭和六二・三
- (19) (8)に同じ
- (20) (4)に同じ
- (21) 竹西寛子氏「源氏物語の憎悪のイメージ」〔国文学〕昭和四五・五
- (22) (13)に同じ
- (23) 小林茂美氏「源氏物語の『状況と表現』——賢木巻の一節から——」〔国

学院雑誌』昭和六二・五)

(24) 同じ

(25) 岩波新日本古典文学大系『源氏物語二』本文による。(『伏見天皇本・板本などは「ところ(所)」、各筆本・尾州本・書陵部本などは「ほとり」と、一一八頁注三にある。)

(26) 御息所の生霊に関しては、和歌などに見られる遊離魂の信仰と比較して述べた、拙稿「あくがれ出る魂——六条御息所生霊論——」(『日本文学論叢』二三 平成六・三) を参照されたい。

(27) 同じ

(28) 後藤祥子氏「六条御息所」(『国文学』昭和四三・五)

(29) 後藤祥子氏「六条御息所はなぜものけになり続けるのか」(『国文学』昭和五五・五)

(30) 小嶋菜温子氏「女三宮・柏木から六条御息所へ——神の罪そして異化の言説——」(『日本文学』平成五・五)

(31) 石埜敬子氏「六条御息所」(『解釈と鑑賞』昭和四六・五)

(32) 藤本勝義氏「源氏物語のへ物の怪」 文学と記録の狭間』第三章 六条御息所の死霊 (平成六・六)

引用した『源氏物語』本文は、岩波新日本古典文学大系によった。ただし、総角巻のみ、岩波日本古典文学大系による。

また、引用した『斎宮女御集』・『大斎院前の御集』は、すべて『新編国歌大観』によった。『後撰和歌集』は岩波新日本古典文学大系による。

(かなり ゆき・修士課程二年)